

阪神間モダニズム-浦邸

2007年国の登録有形文化財

2019年西宮市都市景観形成建築物

浦家住宅は1956年吉阪隆正・U研究室設計で2007年に登録有形文化財(建造物)になる。日本におけるDOCOMOMO100選のひとつでもあり、貴重な吉阪作品。夙川における郊外型住宅の中でもインターナショナルな意味を持つ住宅として非常に貴重である。



竣工当時は寒村の趣のあった夙川東岸ですが、その後高級住宅地になり又その後幹線道路として拡幅されこうして広くファサードを見せてくれるようになりました。

どちらかという東の風を感じる関西らしくない建物ですが、これも西宮の景観です。所有者様のご意向を追い風に2010年から景観指定に向け資料提供していたところ、こうして広く景観建物と認知されて嬉しい限り、みんなで見守っていきたいものです。

浦邸所見

西宮市のJRさくら夙川駅から北に向かう道路の東側にコンクリート打ち放しの陸屋根に煉瓦積み壁面をみせたピロティ住宅が目に入る。これがコルビュジェを師事したフランス帰りの建築家吉

阪隆正設計のこれぞ「モダニズム」といえる住宅である。

建築に至る経緯と歴史的背景建築主で現在の所有者である数学者浦太郎がパリ留学時代に知り合った建築家吉阪隆正が設計した住宅で、1956年に竣工する。パブリック部分とプライベート部分を示す二つのコンクリートの箱が、「く」の字型断面の柱で持ち上げられ、下部をピロティとして解放した建物で、日本のDOCOMOMO100選のひとつでもあり、日本のモダニズム建築の代表といえる建物である。

DOCOMOMO: 近代建築に関する建築、敷地、環境の資料化と保存のための国際組織

設計者: 吉阪研究室 吉阪隆正(1917-1980)。吉阪隆正は東京生まれ、早稲田大学工学部建築科を卒業し、1950年同大学同科の助教授となったのち、フランスに留学しル・コルビュジェのアトリエに勤務する。52年に帰国し、54年吉阪研究室を創設('64からU研究室)。

敷地と配置

建設地の夙川境界は昭和の初めから開発された阪神間有数の郊外型住宅地である。浦邸は阪急夙川駅から夙川を東に渡って緩やかに北方に登った土地に位置する。最近になり、敷地の西側を削る形で計画道路が拡幅されるまでは、敷地の奥深くに、大本に隠れて建っていたが、現在は建物西側が道路に接するようにその姿を見せている。

構造形式

東西に長い敷地にコンクリートの方形平面の箱が2つ、東西にやや雁行し、高さもわずかに変え建っている。それぞれの箱は、一見、四角の辺のまん中を「く」の字型の柱により持ち上げているように見えるが、実際の構造は、この「く」の字柱を主要柱にしてラーメン構造が組まれた方形が主要構造部で、その方形からキャンチレバーで張り出した部分が、見えがかりの箱を形作っている。よって

外壁は構造壁をなさず、自由な開田部が煉瓦造の壁にうがたれているのがわかる。

屋根は陸屋根で、そのわずかな勾配を利用して、軒先に樋を付けることなく雨水を集・排水している。

平面形式、意匠上の特徴など

内部の間取りは、二つの箱が公私に区別され、一方は寝室やバスルームといったプライベートエリア、もう一方はサロン(居間)や食堂といったパブリックエリア、それらの中央は階段やホールの役割を持つ空間で、両方の空間を繋ぐ役目を担っている。

プライベートエリアには、主寝室と女兒(姉妹)の共用個室、男児の個室がある。浴室には主寝室から使えるドアと、他の家族も使えるようもう一つのドアが計画されている。主寝室以外の各個室にも洗面設備が備えられているのは特徴的である。西洋風に習った水回りと個室の考え方であるがトイレに関しては、浴室とは独立して備えられている。

パブリックエリアにはサロン(居間)と食堂、外部に突き出たキッチンがある。また、天井の高いサロン横に四畳半ほどの和室があり、浦氏の母親が暮らした他、仏壇が納められ仏間、または予備室として使われている。この和室には、省スペースのため折りたためる洗面器が設計され備わっていた。上下足を区別しないという、日本では特殊な生活スタイルを所有者自ら希望し、実践する住宅であるのも浦邸の大きな特徴である。

外部、内部共建具は木製で、所有者自らのペンキ塗りなどのメンテナンスで 50 年を超える年月をほぼ健全に経過している。紙張り障子が和洋室を問わず機能的に配され、階段ホールでは色鮮やかなアクリル板が色彩構成され使われているのが意匠的な特徴的である。(一部は建設後、所有者によ

り嵌め替えられ、カラーアクリルの部分が増えている。)

外構工事については、エントランスの床の作画や文字、中庭の煉瓦張りの池・噴水、ポーチ階段の床仕上げは、9 年余り掛けて原設計通り作られ、ほぼ今の姿に至っている。ポーチ階段の手摺りはそのまた後補である。仕上げは、外内部共、コンクリートの打ち放しと二重積みの煉瓦面がそのまま現れている。また、手摺りや台所流し、洗面、その他の家具、建具すべてに一貫して、暖かみと機能性を兼ね備えた明晰かつ濃密な設計がなされている。

藤森照信所見

浦邸の建築史的価値について、藤森照信さんは、第 1 に、

「建築家吉阪隆正の設計になる点」、「しかも吉阪の本格的コンクリート建築として、現存最古の作品」と賞し、

第 2 に、

そのデザイン、「平面は非対称で」、「渦巻き運動が生れた」、「戦後の建築界に彫刻的で、有機的で、毛深い印象の建物」で、その血脈は今も建築界に流れている。

第 3 に、

「建物と資料の保存性のよさ」

「建物は竣工時の様子をよく伝えている。」「加えて、長きに及んだエスキースの各段階を伝えるスケッチが大量に保存され、設計過程を克明にたどることができる」「建築と関係図面の保存状態がきわめて良好」

と国の登録有形文化財への推薦文を記している。